

『執愛奴隷～歪んだ恋情に支配されて～』

著：真式マキ

ill：minato.Bob

「服を脱ぎなさい」

就業前にトイレの個室へ連れ込まれ、朝倉（あさくら）圭（けい）から開口一番そう命令されたものだから、小早川（こばやかわ）悠司（ゆうじ）はさすがに驚いたし困惑もした。

この年下の男はたいていこうである。優しく頼み込むでも甘くねだるでもなく淡々と、もう小早川が従わざるをえないような声で指示をする。遠慮もなにもありはしない。

跪きなさい、脚を開きなさい、もっと見せなさい。

とはいえこんな、いつ人が入ってくるかもしれない朝のトイレで、いきなり服を脱げと言われたことは過去になかった。

「あと三十分で仕事が始まるぞ……」

無駄だろうとは思いながら小早川は朝倉を睨んで小声で言う。朝倉はすいと目を細め酷薄そうに笑った。半年ほど前を境に朝倉はこのような表情を見せるようになった、というよりはこのような表情しか見せなくなった。

初めのころは親しげで楽しげな笑顔を浮かべて小早川にまとわりついていたのに、もうあの朝倉はどこにもいない。

「知っていますよ。こんなところで犯しやしません。それとも期待しているんですか？」

「どうして俺が、なにを期待するんだよ」

「あなた、俺に抱かれるのが大好きだから。こういう狭いところでペニスを突っ込まれて声を殺して泣いてみますか？ いやらしいあなたは、きっとそれでも楽しいでしょうよ。ほら、いいから早く脱ぎなさい」

朝倉の言葉に小早川はひとつ溜息を吐いた。抗うという選択肢はないのだ。いやだいやだと言うだけ無駄だと、のろのろとネクタイに指をかける。朝倉はやはり実に冷ややかな声で「下だけでいいです」と続けた。もう一度溜息を洩らし、ネクタイから離れた手でベルトを掴んだ。

見つめた朝倉の顔にはもう意地の悪い笑みもなかった。無表情だ。そんな顔が似合う美しい男ではある。容姿から受ける印象は非常にクールだ。それでもあのころに見せていた人なつこい表情がそのギャップと相まって可愛らしかったのに、今では可愛いもクソもないと思う。

濃いオリーブ色の髪が、瞳が綺麗だ。切れ長の目や、薄い唇も綺麗だ。背は自分と同じくらいには高く、顔立ちは呆れるほど整っていて、女だろうが男だろうが相手には不自由しないだろう。

なのになぜ、この男はわざわざ自分などを捕まえ朝のトイレに連れ込んで、服を脱げなどとほざいているのか。意味がわからない。

もう秋も半ば、空調があまり効いていないトイレは少し寒かった。冷えた指でベルトを外し下着ごとストラックスを脱いで便器の蓋に雑に投げる。

小早川をじっと見ていた朝倉は、手にしていた小さな鞆を開けた。

朝倉が取り出したのは折りたたみ式の直刃のカミソリと透明のシェービングジェルだった。小早川が怯んで顔を強張らせると、朝倉がちらりとサディスティックに笑った。

正直怖い。怖いのではあるが、もう見慣れてしまったその表情に、ぞくりと理解しがたい興奮を覚えた自分を認めざるをえなかった。

マゾヒストであったわけではないし、なったつもりもないのに、この男を前にしたときの自分は少しおかしいと思う。

「なにを怯えているんです？ 切り落としやしませんよ。剃ってあげるだけ。はしたないあなたにはきつとよく似合いますよ」

「なんで……」

掠れた声を零した小早川に、朝倉は実に美しく笑った。嗜虐的な表情は、それこそ彼によく似合った。

「そうすれば、あなた恥ずかしくて俺以外の人間のの前では服を脱げなくなるでしょう？ 子どもみたいに毛のない股間なんか誰にも見せられないでしょう？ 小早川さん、可哀想にあなたへテロのくせに女も抱けなくなりますね」

確かに朝倉を知るまでは女としか寝たことはなかったが、散々抱かれておいて今さらヘテロもない。だいたいもう朝倉に支配されている身体で、他の誰かと抱きあう気にもならない。こいつはなににもわかっていない。

とは言えずにただ唇を噛んだ小早川の股間に、朝倉はさっさとジェルを塗りつけた。直刃のカミソリで陰毛を剃っていく彼の手つきは意外なくらいに丁寧だった。それでも、微かな痛みと徐々に肌があらわになる初めて知った頼りなさに小早川は思わず顔を歪めた。

惨めだ。惨め極まりない。もう三十にもなる大人の男が朝っぱらから職場のトイレで剃毛？ どうしてこんなことになっている。

だが、こうして屈辱的な扱いを受けることに、そして性器に触れる朝倉の指に、僅かに乱れてしまう呼吸を巧く殺すことができなかった。

なぜこんなに変態的なことをされて自分は興奮するのか。まったくわけがわからないと思う。

「は……」

慎重に器用にすべての毛を剃り落としてから、朝倉はわざとらしくいかにも楽しそうな声で言った。

「勃っていますね。どうして？ 俺にこんなことをされてあなた勃つんだ。ほんとうにいやらしい人です。いやらしくてはしたなくて、いかれていますよ、小早川さん」

「黙れ……、おまえの、せいで……ッ」

「はいはい。しかたがないな、擦ってあげますからさっさと出しなさい。遅刻しますよ」

「あっ、はあ、朝倉……っ」

朝倉はジェルに濡れた手で少々荒っぽく小早川の性器を掴み直し、確実な動きでそれを扱った。勝手に喘ぎが唇から零れ、慌てて自分の手で口を塞いだ。

ここは職場のトイレだ。おかしな声を上げて、誰かに聞きつけられたら言い訳できない。

「そう、いい子です。あまり声を出さないで。まあこの姿を見られて恥ずかしいのはあなただけですけど。俺はもうなんとも思いやしません、俺はどうなったっていいんです、言ったでしょう」

手を動かしながら、朝倉は小早川の耳元に唇を寄せて囁いた。ぐちゃぐちゃという卑猥な音と触れる吐息に、余計に身体が熱くなる。

立っている脚がかたかたと震えだすまでに、大して時間もかからなかった。この男は自分をよく知っているのだ、きつく目を閉じてそう思った。

この男は自分を、自分の身体をよく知っている。どんなセリフを吐けば、どこにどう触れれば落ちるかなんて完璧に把握している。

「ねえ、こんなに興奮して恥ずかしくないんですか？ ここがどこだかわかっているんですか、自分がなにをされているのかわかっていますか？ 職場のトイレで、剃られて、あなたもうこれだ。変態」

「ん、う……、言うな」

「ああ、いきそうですね。いつもより早いんじゃないですか、ほんとうにはしたくない。いっていいですよ、小早川さん。いきなさい」

もう無理だ、と小早川が下肢に力を込めたところで、ふと朝倉は性器から手を離れた。え、と思う間もなくその手を尻に這わされ濡れた指をぐっと強引に突き立てられて、抑えていたはずの声は勝手に唇から散った。

「ああ……ッ！ や、あ……ッ」

内側に朝倉の指を感じた瞬間に射精していた。我慢しようにも我慢できなかった。それくらいに朝倉に尻をまさぐられる感覚は快楽であったし慣れてもいた。いや、慣らされてもいた。

「だらしない。中でいきましたね、小早川さん。指を入れられただけでいくななんてあなたもうメスですよ」

絶頂の衝撃に身体を硬直させている小早川に、朝倉はいやに冷ややかに、そしてどこかからかうように言うと微かに笑った。

あなたもうメスですよ。

屈辱的なセリフは愉悦に震える小早川の耳にはなぜか煽情的に聞こえた。

そうだ。今自分はこの男のメスだ。

直刃のカミソリと濡れた手をトイレットペーパーで拭く朝倉を潤む目で見つめた。どうしてこうなってしまったのか、なぜこの男はこんなことをするのか。いくら考えたところでいつだってわかりはしないが、今朝はことさらわからない。

朝倉、と名を呼ぼうとしても声は出なかった。

多少は呼吸が落ち着くのを待ってから雑に自分の身体を拭き、のろのろとスラックスを穿こうとした。その小早川の姿を見て、カミソリとジェルチューブを靴にしまった朝倉が飄々と言った。

「下着はいりません」

「え……」

「だから、下着を穿かずにそのまま今日一日仕事をしなさい。あなたは変態なんだから、きっと楽しめますよ。発情して仕事にならないかもしれませんがね」

朝倉は小早川が手にしている下着を奪うとそれも靴に突っ込み、さっさとトイレの個室を出ていった。あまりに素っ気ない。思わず呆然と閉められたドアを見つめてしまってから、小早川は深々と溜息を吐いた。

下着を穿かずにそのまま今日一日仕事をしなさいだって？ センスのないアダルトビデオよりひどい仕打ちだ。

といっても持ち去られてしまったものはしかたがない。こんなところでぎゃあぎゃあわめいてもあの男は戻ってはこないだろうし、他の人間が聞けばただの変人だ。

愉悦の余韻で怠い手でなんとかスーツを着込むと小早川は個室を出た。尻に指を突っ込まれた違和感が気持ち悪く、また言ってしまうなら、気持ちがよかった。

変態。確かにその通りだ。最初は痛いだけだったのに、今となっては彼の指一本で射精する玩具だ。

鏡の前でスーツを整え、小早川は自分の表情を確認した。風邪でもひいたように微かに上気している顔にうんざりする。

女はセックスの直後にこんな目をしていたっけ。思い出そうにも最後に女を抱いたのは半年以上も前で、しかもその記憶はなぜか曖昧だった。脳裏に蘇るのは初めて自分を押し倒したときの朝倉のどこか切なげな顔だけだ。

黒い髪、黒い瞳、ストライプの入ったダークスーツに青いネクタイ、別にどうといった特徴もないサラ

リーマンが鏡の中からこちらを見ている。

過去につきあった女には格好がいいだの男前だの言われていたが、惚れた欲目というやつだろう。あるいは彼女たちのリップサービスだと思う。いたって普通の男だ。

朝倉はなにが楽しくてこんなに平凡な男を取っ捕まえては飽きずに手を出してくるのか。

「……おはようございます」

試しに小さく発した声は掠れているというほどでもなかった。少し安堵して、それからなにが安堵だと再度派手に溜息を吐き、のろのろとトイレの出入り口に足を向けた。

朝一番で陰毛を剃られて尻を指でいじくられて、そのうえ下着を持ち去られた。股間がすかすかして頼りなくいたたまれないような気分になるが、夜、お疲れさまでしたと言うまで今日一日なんとかこれですげすしかない。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>